

大学生のコンピテンシーの新たな定量的把握方法と

就職・採用活動への活用への試み

－「GROW」の開発とその発展可能性について－

亀野 淳 *

福原 正大 **

<概要>

本報告においては、コンピテンシーを定量的に把握するツールである「GROW」について、その概要と大学や企業の活用方法、事例として北海道大学での取組と分析結果などを紹介し、最後に今後の課題と GROW を活用した就職・採用システムの可能性について展望したい。

GROW はスマートフォンを活用した自己評価と多面評価によりコンピテンシーを客観的、定量的に把握するツールである。2016 年に開発され、いくつかの大学、企業が利用しており、2017 年 10 月現在で 85,000 人を超える学生が参加している。北海道大学においても、試行的に実施しているが、インターンシップ参加者やその効果について特徴的な結果もみられた。今後、同ツールの活用が広がることで、学業の負担となる現状の就職活動を大きく改める波及効果も期待できる。

<キーワード> コンピテンシー、評価、就職、採用、定量的把握、GROW

1. 本報告の趣旨・目的

知識基盤社会の中で、ジェネリックスキルの重要性は OECD の DeSeCo などで指摘されており、日本においても、経済産業省が「社会人基礎力」、厚生労働省が「就職基礎能力」、文部科学省が「学士力」などを提唱している。

大学生の就職・採用活動に当たっては、ジェネリックスキル、特に、コンピテンシーの重要性が企業、大学、学生にも認識されつつある。

しかしながら、コンピテンシーを定量的に把握する方法は OECD の PIAAC や AHERO などで試みがなされており、日本においても、PROG (Progress Report on Generic Skills) ¹ も含め、現在定量的な把握に向けて試行的な取組が実施され始めたというのが現状である。

学生を採用する企業側からみれば、短期間に多くの学生の中から当該企業に必要な人材を採用しなければならないが、現実には多くの労力を投入しながらも学生のコンピテンシーを十分に把握することができず満足が得られる採用活動とはなっていない。また、学生側からみても、希望企業がどのようなコンピテンシーをより重視しているのかなどが不明であり、付け刃的な就活テクニックの習得に労力を使う結果となってしまっている。したがって、現状の採用・就職システムは、採用側（企業）、就職側（学生）の双方にとって多大な労力を浪費しており、社会全体としても多くの損失をもたらしているともいえる。

また、従来のコンピテンシーの定量的な把握方法は本人の主観による回答から算出されるものが中心であり、また、数パターンテスト問題を用意しているのみであるので、いつでも測定できるよう

* 亀野 淳(KAMENO, Jun)・北海道大学高等教育推進機構准教授 jkamen@high.hokudai.ac.jp

** 福原 正大 (FUKUHARA, Masahiro) ・Institution for a Global Society 株式会社代表取締役社長
m.fukuhara@i-globalsociety.com

なものではない。学生を採用する企業側からみれば、この結果をすべての志望学生から瞬時に収集し活用するのは非現実的であり、企業側が学生のコンピテンシーデータを活用するには大きな制約があるといえる。

こうした中で、より客観的なデータを自己評価だけではなく、他者の評価を加えた上で、学生がスマートフォンを使用して簡単に、いつでも測定できるよう開発されたのが本報告において紹介する GROW である。

2. GROW の概要

2.1 GROW の内容、特徴

GROW は、スマートフォン上で動作するループリックによるコンピテンシーの自己評価と多面評価と、Implicit Association Test を応用し指の動きも勘案した気質特性である Big5 を分析するアプリケーションである。GROW を用いたループリックによるコンピテンシー評価の流れは以下のとおりである。



【GROW を利用した評価手順】

1. 被評価者がスケール上のカーソルをスライドさせると、ループリックの記述語がスケール上部にポップアップで表示される
 2. 「NEXT」ボタンでスケールでの選択を確定できる。評価の判断に迷った場合は「SKIP」で判断を保留することもできる
 3. 一定数の評価者から評価をもらえると、被評価者のコンピテンシー25概念のスコアが集計され、一覧で表示されることで、自身が他者からどのように評価されているのかを知ることができる
- 特徴としては、評価者の評価のゆがみや気質、評価にかかる時間や指の迷いをもとに機械学習により自動調整し、真のコンピテンシー評価に近づけるところである。

2.2 大学、企業との取組について

これまでの大学との取り組みは以下のとおりである。

- ・G-SPASE (東京大学、東京海洋大学、青山学院大学、慶應義塾大学、事業構想大学院大学のコンソーシャムが運営する日本を含むアジアの大学・大学院生を対象とした宇宙インフラと地上インフラを利用する革新的な人材を育成する国際教育プログラム) における学生のコンピテンシーの計測 (2016・2017年度)
- ・慶應義塾大学リーダーシップ論基礎における学生のコンピテンシーとグループ学習の効果計測 (2016・2017年度)
- ・慶應義塾大学経済学部フィンテック演習bにおける学生のコンピテンシー・気質特性と eLearning 学習の関係性調査 (2017年度)

また、企業の採用関連では、2017年度に全日空、三菱商事、野村證券、東京海上、旭硝子など 50社を超える企業が学生のコンピテンシーと Big5 気質評価に利用している。

2016年度に GROW を開発後、2017年10月で 85,000人を超える学生が GROW でのコンピテン

シーや Big5 気質特性分析を行い、自身の強みの発見に役立ったという評価が得られている。

3. 北海道大学における試行

3.1 北海道大学における試行の取組の概要

報告者が担当している授業科目等で受講生に GROW の実施してもらった。対象は、主に学部1年生を対象とした「キャリアデザイン」(GROW 参加者 41人)と学部3年生と修士1年生が中心の「インターンシップ」(GROW 参加者 73人)である。

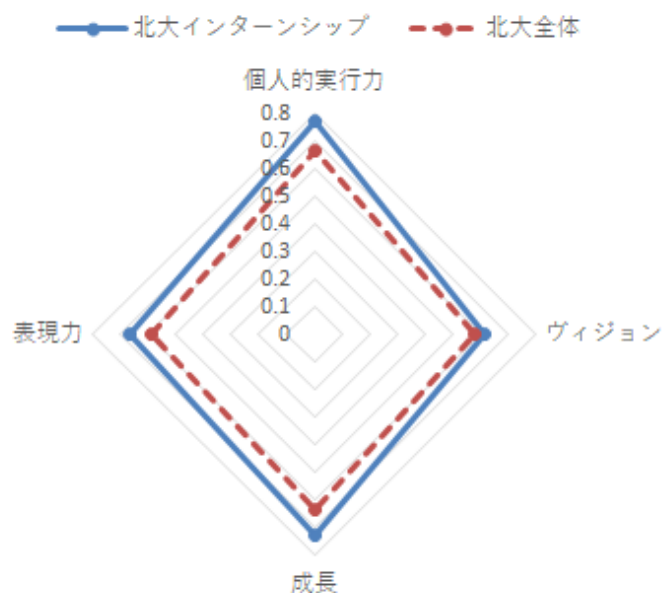
3.2 コンピテンシーの結果

今回の結果を「インターンシップ」学生のデータをもとに簡単に紹介すると、以下の特徴がみられた。

- ・インターンシップ先で受けているコンピテンシー360度評価は、友人同士で行う360度評価よりもすべてのコンピテンシーに関して10~15%厳しく評価されこととなった。大学というコミュニティの中よりも外の社会の方がより厳しく学生を評価していることがわかる。このことは、大学というコミュニティを離れて、自らの社会における能力を知る機会となっている。
- ・インターンシップを受けた学生のコンピテンシーは、同大学の受けていない学生平均と比べると総じて高いが、ビジョンの構築については優位な差はみられなかった(図1)。

これらの結果については、今後、継続的にフォローしていく予定である。つまり、インターンシップ直後の変化だけではなく、その後の大学での学習や生活によりインターンシップの影響がどのように現れるかなどを明らかにしていきたい。

図1 インターンシップ参加者とそれ以外の学生の状況(北大)



4. まとめと今後の課題

4.1 今後の方針

今回の分析では、企業インターンを受ける学生に対して、インターン期間中に一回 360 度評価を受けてもらう形で進め、コンピテンシーを定量的に把握した。今回はパイロットテストとの位置づけであり、学生に対するコンピテンシー定量評価の有効性を確認することに焦点を当てた。

今後は、インターンの前後、同じ大学内でインターンシップ経験の有無によるコンピテンシー比較群の分析を行うことで、インターンシップの効果測定をより精緻に行うこととしたい。また、大学入学時から卒業時までの計測など、大学時代生活全体についての分析も進めることで、大学の様々な学びや学外での経験がどのように各学生のコンピテンシー育成につながっているかの定量的な計測も進める。これまでの知識を測るテストと合わせて大学側が把握し、あわせて企業が必要とする知識やコンピテンシーを可視化していくことで、大学の教育に対するフィードバックが期待できよう。

4.2 こうした取組の就職活動・採用活動への波及効果など

大学生のコンピテンシーの定量把握を進めることで、各企業が必要とするコンピテンシーとの合致度、および差が明らかになる。大学生は、これまでのような短期間で面接の結果をある断面（主に大学4年生の6月）で重視する従前の就職活動ではなく、希望する企業のコンピテンシーを理解し、企業が必要とするレベルまで大学生活を通じ成長させることに専念できる。GROW をインターンシップや採用評価で利用する企業は大きく増加していることから、今回の事例のように大学が主体となり学生のコンピテンシー定量化において先導することで、学業の負担となる現状の就職活動を大きく改める波及効果もみられるであろう。

(注)

1. PROG (Progress Report on Generic Skills) については、学校法人河合塾・株式会社リアセックが開発したテストで詳細は学校法人河合塾・株式会社リアセック(2015)などを参照。

(参考文献)

学校法人河合塾・株式会社リアセック監修『現代社会をタフに生き抜く新しい学力の育成と評価 (PROG 白書 2016)』学事出版、2016 年